

寅年に虎を思う

清水 勝

新年に送られてきた年賀状には優しいユーモアに富んだ虎のイラストが多かった。中にはコロナウイルスをやっつける頼もしい虎の絵もあった。

虎は寧猛な野獣として、強き者、武勇そして王者に例えられる。『虎嘯けば谷風至る』(淮南子) 『虎は死して皮を残し人は死して名を残す』(十訓抄) 『虎視眈々』(易経)。一方、虎は危険・凶悪といったイメージもある。『虎を千里の野に放つ』『虎の尾を踏む』(易経) 『苛政は虎よりも猛し』(礼記)。

日本には存在しない虎が掛け軸や屏風に描かれ、好まれているのは、虎の力強い眼光で魔を払い、厄除けの力があると大陸から伝わってきたからだろう。とりわけ、虎の皮は十一世紀頃から朝鮮や中国からの交易品として珍重されており、病気や祟りから身を守るものとして用いられ、鎧にも虎皮が付けられている。

さて、その虎については絶滅危惧種に指定され、アジアに広く分布していたものが現在では三千九百頭程と推定されている。うち、最多のインドで二千頭、中国はたったの十頭程だ。

今年、日本は寅年であり、特に虎に親しみを感じる年だが、虎にとっても重要な年になっている。それは虎が生息する十三ヶ国を中心に『グローバル・タイガー・サミット』が十二年振りに開催される年なのだ。過去の取り組みの報告と、最新の野生虎の個体数が明らかにされ、次の十二年に向けた、新しい虎保護の国際目標が合意される予定だという。

虎をはじめ絶滅危惧種の保護には、すみかである森林の保全、違法取引や密猟の防除のみならず、生息環境を大きく変えてしまうおそれのある気候変動への対応も必要になっている。

改めて身近に虎・タイガーの名が溢れているのに気付いた。干支の寅に限らず、虎に絡んだことわざ、地名(虎ノ門)、商品名(虎屋の羊羹、タイガー魔法瓶)、そして阪神タイガース等々。

虎を絶滅させるわけにはいかないと、寅年を迎え強く思った。